

メイベル・L・トッドの見た日本

— 「明治三陸大津波」の記事を中心に—

梅本 順子

Junko UMEMOTO. Japan as Seen by Mabel L. Todd: About the Article of “The Tidal Wave”. *Studies in International Relations* Vol.37, No.2. February 2017. pp.17-24.

Mabel L. Todd, essayist and editor of Emily Dickinson’s Poems, visited Japan twice in 1887 and 1896, accompanying her husband who was the leader of the Amherst Eclipse Expedition. On her second visit in 1896, on her way to Hokkaido where her husband was establishing an observatory, she witnessed the aftereffect of the catastrophic tidal wave caused by the Meiji Sanriku Earthquake. She wrote down what she saw directly and what she heard from her private interpreter, who reported on what was in the Japanese media of the time. I will discuss Mabel’s impressions of the disaster, using her article, “The Tidal Wave,” published in *Corona and Coronet: Being a Narrative of the Amherst Expedition to Japan, in Mr. James’s Schooner-Yacht Coronet, to Observe the Sun’s Total Obscuration 9th August, 1896*.

はじめに

メイベル・L・トッド (Mabel L. Todd, 1856-1932) とはいかなる人物か。最近, 朝日新聞デジタルが北海道の枝幸を特集した記事(「メイベル・トッドと枝幸(1) - (5)」2014.4.2~4.30)でその名を眼にしたが, 日本において彼女を扱ったものは決して多くない。筆者にとって, 彼女の名前を初めて知ることになったのは, 19世紀中期の開国から20世紀初頭までの日米交流に関わった多彩な職業や立場の異なる人物を取り上げた作品『グレート・ウェイヴ』(*The Great Wave: Gilded Age Misfits, Japanese Eccentrics, and the Opening of Old Japan*, 2003)の6章であった。この章では, パーシヴァル・ローエルと並んでメイベル(こののち夫のディヴィッドと区別するためこう呼ぶ)が紹介されていた。しかも, その内容は, 奔放な性生活(隠遁の詩人エミリー・ディキンソンの兄と不倫)に触れていたのである。メイベルという人物は, 編集者(エミリー・ディキンソンの詩の編集)やエッセイストとしても活躍していることから, その落差はあまりに衝撃的だった。天文学者でアマースト大学教授の夫ディヴィッド・P・トッド

(David P. Todd, 1855-1939)がありながら, その地方の名士で弁護士のオースティン・ディキンソン(Austin Dickinson, 1829-95)と十数年にわたり不倫関係を続けただけでなく, 夫がそれを黙認していたといわれ, 彼女とオースティンの愛の往復書簡はすでに1984年に書籍⁽¹⁾として公開されている。

そのような女性が日米交流とどうかかわったのか。『グレート・ウェイヴ』の作者であるクリストファー・ベンフィー(Christopher Benfey)は, メイベルを北海道北部のアイヌ部落を訪れた最初の女性としたこと, ならびに女性初の富士山登頂に成功した人物とした点で誤っている。前者に関しては, 1878年に北海道の北部ではないが苫小牧近郊の平取にあるアイヌ部落を訪れて『日本奥地紀行』(*Unbeaten Tracks in Japan*, 1880)を著した英国人のイザベラ・バード(Isabella L. Bird, 1831-1904)がいる。また, 富士登山に関してもメイベルは第一号ではない。行動的なメイベルは, 1887年9月4日から6日にかけて, 夫らとともに富士登山に挑み, それを雑誌記事(“Ascent of Mt. Fuji the Peerless,” *The Century*, 1892年8月, 夫と共著)として発表したという意味では女性第一号になる

かもしれないが、メイベルより二十年も早い1867年に、夫らとともに富士登山に成功した英国公使夫人ファニー・パークスがいた⁽²⁾。第一号の称号は、彼女に譲るにしても、メイベルは、独自の視点から日本を欧米に発信したという点で先駆的な役割を果たしており、その足跡を追うべき人物の一人であろう。

では、メイベルは、どのような目的で来日し、なぜ富士登山に挑戦することが可能になったのか。当時、オースティン・ディキンソンとの恋愛が進行中であったメイベルにとって、夫に同行して日本へ行くことにためらいがなかったわけではなかったが、1887年、日本で皆既日食観測を行う目的でアマースト大学の観測隊を率いた天文学者の夫ディヴィッドに同行して、初来日を果たしたのである。その結果、夫らとともに富士登山をする機会に恵まれたのであった。その一方で、旅行中でさえ、不倫相手のオースティンに宛てて書簡を送り続けたのだ⁽³⁾。

メイベルは、夫が率いる観測隊にともなって生涯で2度の来日を果たしている。第1回はすでに言及した1887年で、観測拠点は福島県の白河であった。第2回の1896年は、北海道東北岸の枝幸(えさし)を拠点とした。2回目の時は、すでにオースティンは逝去していたことから、メイベルは日本の観察に没頭できたのかもしれない。今回取り扱うのは、2回目の来日の折のメイベルの体験である。

メイベルは、コロネット号という大型ヨットで総勢9人の一人として横浜に到着した。枝幸での観測準備のために一足早く北海道に向かった夫たち一行とは別行動をとり、観測とは関係のない残りの人々といっしょに関西方面や瀬戸内を旅したのである。メイベルの目的は、実際に見聞した「日本」を、記事を通して発信することにあった。

本稿では、メイベルが2回目の来日で見聞した日本を著したエッセイ集の『皆既日食とコロネット号』(*Corona and Coronet*, 1899)⁽⁴⁾の中から、“The Tidal Wave”(「津波」)と題するものを中心に、彼女の見た1896年当時の日本をたどる。この作品は、メイベルの見聞した明治三陸地震による津波の被災地の惨状をもとに仕上げたものである。西

日本を旅した後、夫のいる北海道を目指すために一人旅となったメイベルの乗船した船は、被災地に救援物資を提供するために一時港に立ち寄り、さらに津波による瓦礫が漂う死の海を北に向けて航行したのである。

一人旅を始めるまでのメイベル

メイベルの1896年の来日に伴う様々な体験は、すでに触れたように『皆既日食とコロネット号』としてまとめられている。旅の経緯をはじめ、14章までは来日途中立ち寄ったハワイ諸島についての記述だが、後半の15章以降は日本での見聞が占めている。この作品集は、1896年から1898年にかけて、『ネーション』(*The Nation*)をはじめ、『センチュリー』(*The Century*)、『アトランティック・マンズリー』(*The Atlantic Monthly*)、『アウトルック』(*The Outlook*)など、当時のアメリカの一流誌にメイベルが発表した記事を各社の好意で使用している旨、序文で述べている。

日本に関する章の大半を形成しているのは、『ネーション』誌に4回に渡って同一のタイトルで発表した「日本におけるアマースト皆既日食観測隊」(“The Amherst Eclipse Expedition to Japan”)⁽⁵⁾の記事である。この中には、ハワイ滞在から日本までのエピソード、北海道での観測とアイヌの描写、そして横浜に戻るまでの旅程が含まれている。驚きなのは、当時の事情を考慮すると、雑誌記事となるまでのその早さである。1896年5月から8月にかけての3か月余りの間に彼女が体験したことが、1896年の6月から10月までに発行された雑誌4冊に掲載されているのである。いずれも平均して2か月弱で記事になっているのであった。この時すでに編集者でありエッセイストとして知られていたメイベルは、常に記事を書き続けていたことがわかる。夫の皆既日食観測隊に同行したとはいえ、自分なりの目標をもって積極的に日本見聞記をしたためていたメイベルの片鱗が覗かれる。

また、これらに加え、アイヌ部落については『アトランティック・マンズリー』などに、帰国後詳細な記事を発表している⁽⁶⁾。言い換えるならば、『皆既日食とコロネット号』の章それぞれが、メイ

ベルの見た日本文化論となっているのである。ただ、先に紹介した記事から書籍にする際に書き直したことにより、むしろ旅程などよりも、体験の内容が重視され、また書き加えられた章も出てきたのである。

ところで、メイベルの旅程を知るには、彼女の行動の背景、並びにその旅程を客観的に裏付けるもう一冊の本が存在していたことは幸いだった。それが、作者は不明だが、『コロネット号の思い出』（*Coronet Memories: Log of Schooner-Yacht Coronet on her Off-shore Cruises from 1893 to 1899*）⁽⁷⁾と題する本である。これは、コロネット号の6年あまりにわたる航海日誌なのである。

『コロネット号の思い出』の1896年にあたる部分は、「ハワイ諸島から日本へ」と題し、10章プラス補遺からなっている。この中にメイベルの行動も記録されていた。特に補遺は、観測隊の技師を務めたペンバートンという人物の日記からなっており、枝幸での観測隊一行のひと月余りにわたる詳細な活動記録が残る⁽⁸⁾。この中に、メイベルの枝幸への到着（8月5日）をはじめ、天候不順で観測隊が記録撮影に失敗した時のメイベルの落胆ぶりなどについての言及もあった。ペンバートンの日記以外の部分にも、『コロネット号の思い出』には、メイベルが見聞したことを逃すまいといつも甲斐甲斐しくペンを動かしている様子が散見される⁽⁹⁾。

では、この日食観測隊はどのようなメンバーからなっていたかをはじめ、旅程について触れておきたい。彼女を含む観測隊は、枝幸で皆既日食が予定されている1896年8月9日までにその準備を整えるということで、一月以上前（1896年6月22日）に日本に上陸した。『皆既日食とコロネット号』の序文からは、メンバーはトッド夫妻を含めて9人であり、天文学者から医者、技術者、会計担当というようにそれぞれの役割を持つ男性7人と、女性は船長夫人とメイベルだったことがわかる。また、日本政府や都道府県の長をはじめ、さまざまな人々がこの観測隊を支援していたことが述べられている。北海道では、新渡戸稲造の訪問を受けている。さらに序文には津田梅子の紹介と、彼女への謝辞を含む。これ以降、メイベルの著した『皆

既日食とコロネット号』に基づいて彼女の見た日本を追う。“Japan Revisited”（「日本再訪」）と題する記事からメイベルの2度目の日本体験は始まるのであった。

「日本再訪」の冒頭で、「長いことバラ色の雰囲気の中に閉じ込められていた遠い地の記憶には、実際戻ってみると幻滅に変わるという危機が潜んでいる。長期にわたり輝かしい思い出として理想化しておく、再び現実に目を向けた時、空しくなってしまうかもしれない。」⁽¹⁰⁾と前置きしたうえで、初来日から9年を経て再訪した日本のようすを紹介している。1896年の6月の朝、東京湾にコロネット号にて到着したメイベルが見た日本は、相変わらず美しい日本だったが、長い船旅で情報に飢えていた一行の目に最初に飛び込んできたのは、6月15日に起きた明治三陸地震の大津波による甚大な被害を伝える衝撃的な新聞記事だった。彼女のエッセイのもとになった記事を求めて、当時の日本語の新聞記事を追ってみた。地震がもたらした津波で大打撃を受けた三陸の被災関連の記事は、地震の起きた翌々日にあたる6月17日ころから出始め、詳細な被害がわかるにつれ、その量は増している。とりわけ、被害の実態と国、もしくはは地方政府の対応などの情報に加え、被災した個人の行動やそれにまつわるエピソードの数が、被災後1週間から10日を過ぎるころから、飛躍的に増えてきている。奇しくも、そのような時期にメイベルらの来日時期が重なったのであった。

メイベルは、敢えて、アマースト皆既日食隊には、明らかに自然の妨害がつきものだと述べたあとで、本州北部で起きた災禍を綴っている。二日か三日のうちに津波が30以上の町を荒廃させ、6,000軒以上の家々を一掃し、30,000から40,000の人々が亡くなったと述べている。遡ること40年で、東京には地震（安政地震）が起きており、1888年には磐梯山の噴火、1892年には名古屋地域の地震と、日本列島が常に災禍に見舞われてきたことにも触れている。今回の地震で、被害は宮城、岩手、青森と海岸地域の住人が犠牲になったこと、北は八戸から南は仙台湾の入り口に当たる金華山に至るまでの広い範囲に渡ると説明する。さらに日日新聞や時事新報は災害報道だけでなく、日本

赤十字社と共に、災害の見舞金を募っていることにも触れているのである。

ただし、この「日本再訪」の章では、震災にまつわるものだけに終わらず、途中からは彼女の見た日本が述べられており、1890年に来日したラフカディオ・ハーンの、最初の経験をもとに書かれた“The First Day in the Orient”（「極東での一日」）を思わせるような描写が続く⁽¹¹⁾。ある晩、茶の湯に招かれた彼女は、伝統文化を体験して、改めてその感動に浸った。「19世紀の近代化が急速に進む中で、美しい古い習慣は消えてしまうか、少なくとも見えないところに押しやられてしまうおそれがある。前の来訪の際は、純粹に歴史的で伝統的な形が継承されていて、より多く目にすることができたが」と嘆いた後で、「厳かな雰囲気で繊細な茶の湯をもう一度見ることができたのはうれしかった」⁽¹²⁾と綴っている。

メイベルが『皆既日食とコロネット号』を出版したのは、ハーンと同じアメリカのボストンにあるホートン・ミフリン社であった。先に触れた来日当初のハーン作品を収めた *Glimpses of Unfamiliar Japan*（『日本瞥見記』）が出版されたのが1894年、『皆既日食とコロネット号』はこれに遅れること5年であった。ハーン作品の方はエッセイもあるが、途中からは語り直しの文学作品を得意としたことで、エッセイだけを綴ってきたメイベルとは異なる。当時の欧米人にとっては、地理的距離のみならず精神文化の面でも遠い極東の日本で見聞するものはどれも目新しく、その関心はおのずと伝統文化に収斂してゆくことになったのかもしれない。

これから触れるメイベルの“The Tidal Wave”（「津波」）という章の原型となったような記事は、該当する年代の『リーダーズ・ガイド』には見当たらない。これに掲載されないような小さな雑誌に出していたものか、それとも『皆既日食とコロネット号』のための描き下ろしか判断しかねるが、メイベルにとって生々しい傷跡が残る被災地を見たという経験を何か文章にしなければならぬと感じたのであろう。津波を題材にした創作小説であるラフカディオ・ハーンの“A Living God”（「生き神」⁽¹³⁾、初出は *The Atlantic Monthly*, 1896年12月号）とは全く異なるものの、津波の影響を目の

当たりにした西洋人がそれをどうとらえ、作品化したかがたどれる。

メイベルが夫らの皆既日食観測隊に同行して来日したことはすでに述べたが、ではなぜ一人で三陸沖を通る船に乗ったのか。それまでの経緯について触れておきたい。日本まで乗ってきたコロネット号は、観測に関係ない人々（メイベルは「非科学分隊」と呼んでいる）を乗せて神戸に向かうことになる。この中にメイベルもいた。メイベル自身、最初から観測隊と共に北海道に向かうほどの専門的な知識もないが、全く無知というほどでもなかったので、観測隊の出発を見送ってから、観測とは関係ない人々と関西方面の観光を楽しんだあと、北海道に渡って観測隊に参加することで、観光と観測の両方を経験することを選んだという。コロネット号の一行が来日したのが6月22日で、観測隊が北海道を目指して東京を出立したのが7月1日、日食が予定される8月9日の観測までには一か月以上の準備期間があったことが、彼女にとって幸いしたということになるだろう。

観光組は、岐阜での鶺鴒見学を楽しみ、京都観光、そして神戸と進み、瀬戸内海のクルーズも行っているものの、『コロネット号の思い出』の作者によると、メイベルは時間がないということで、7月20日に瀬戸内海をあきらめて、他のものとは別行動になる。通訳の青年に伴われて一人、奈良、大阪と回り、再び7月23日に神戸に戻って、北海道を目指すだろうとある⁽¹⁴⁾。

一方、観測隊のメンバーの行程にも触れておきたい。メイベルが後に得た情報では、観測隊は、現地の枝幸に7月10日についたとのことであった。定期便があるようなところではないため、全面的に日本政府の援助を得た観測隊は、機材はさくら丸という船で函館に送り、科学者をはじめ助手や料理人などが加わった一行は汽車で青森まで行った。このあと、青函海峡を渡ったのち、函館で機材を運んできたさくら丸に合流して小樽まで行き、小樽からは、駿河丸という特別船に乗りかえて現地に向かうことになったのだった。

ちなみに、なぜ枝幸という最も行きにくい場所が選ばれたかという点については、次のような説明が与えられている。皆既日食の道筋として候補

に挙げられたのが北海道の釧路，北見，根室の三地方であった。1893年から95年までの三年間，7月25日から8月25日までの間に2時，2時半，3時と日に三回観測が行われた。最終的に，日食の道筋にあたる村々の中から雲が出ないところということで，南岸の厚岸が1番，北岸の枝幸が2番だったが，日食の前後の30分間の晴天の持続性という点で，枝幸が選ばれたと述べている⁽¹⁵⁾。

メイベルの見た大津波の災禍

関西方面の旅を終え，北海道への一人旅を開始したメイベルを支えたのは通訳の働きが大きい。元同志社の学生で，英語が堪能であるばかりか独仏語の知識も持っているという学究肌の青年を通訳にすることができたという。この青年は天文学の知識も持ち合わせ，望遠鏡を使用した経験の持ち主だということで，メイベルは大いに気に入ったようである。彼を通してメイベルは貴重な体験をすることになったのだった。

当初，メイベルは，夫のいる観測隊がたどった陸路を汽車で青森まで行くという旅を考えていたものの，奈良や大阪で起きた洪水のために断念せざるを得なくなる。汽車に乗れば，1887年の観測の拠点に選んだ，福島県の白河を再び見ることができたのにと，今回は少し残念な気持ちになったという。結局，日本郵船の大連丸で，海路，函館を目指すことになったのだった。

乗船中，太平洋岸でメイベルが目にしたのは，明治三陸地震（1896年6月15日）の津波から一月余りたつというのに，各地に惨禍の跡が残っていたことである。大連丸は宮城県の荻ノ浜（被災地の南端にあたる）で，見舞金や救援物資の荷卸しのために二，三時間停泊した。荻ノ浜は岬の内側に位置していたので，津波の被害はなかったという。『東京朝日新聞』の6月26日の記事に，日本郵船は嘯害地（津波の被災地）への運輸のために荻ノ浜を碇繋所とするという内容があることから，この記事より一月ほど経っていたものの，メイベルらが乗船した船もこのきまりに従って停泊したことがわかる。

メイベルは，日本の時事的情報を入手したいと

渴望していただけに，日本語の習得の困難さを実感したのだった。キャビンのテーブルに置かれた乗船客用の新聞，雑誌には，大津波の痛ましい惨状の詳細，原因，生存者への援助など多くの記事が掲載されているというのに，それが読めないのが情けなかったのである。通訳の青年に，訳してもらうことになったのだが，「口頭での翻訳だと視覚に訴える漢字の意味が失われてしまうのではないか」と不平を口にする⁽¹⁶⁾。ただし，日本人画家による痛ましい惨状を示す挿絵は翻訳を必要としないともいう。この後はメイベルが見聞きした被災地の惨状を彼女の記述に従ってみてゆく。

地震という悲劇が起きた1896年（明治29年）6月15日は月曜日だが，旧暦の5月5日（祝祭日）にあたっていることから祝っていた家族もあったようだ。奇妙なことに気圧計には何の変化もなかったが，15日早朝，井戸の水が枯れるという異変に気づいた老女がいたとメイベルは述べている。しかし，彼女の指摘に周囲は耳を貸さなかったという。また，実際に打ち寄せた津波は，いったん引いて再来するときには540メートルにわたり砂を海岸に積み上げるほどのものになっていたという。波と波との間は240メートルから360メートルほどあり，10分程度ですべてが無くなったと述べている。

さらにメイベルが取り上げたエピソードで興味深いのは，災禍の中にあって発揮された日本人らしい自己犠牲の精神である。釜石の電信局長が，自分の目の前で家族全員が流されたにもかかわらず，九死に一生を得た本人は，砕け散った瓦礫の中から電信機器を探し出すという冷静な行動をとったために，外界との交信がじきに再開したという美談を取り上げている。メイベルは情報源を記載していないが，内容から『東京朝日新聞』の6月20日にある「釜石電信局長の義憤」と題するものあたりが下敷きになったのではないかと考えられる。

引き続き，日本人の美談と考えられるのは，波が町を襲ったために雄勝で刑務所から解放された囚人が，数日後に自発的に宮城刑務所に戻ったという話である。全く同じ内容ではないものの，『東京朝日新聞』6月18日に「宮城集治監雄勝出役所

の海嘯」という記事がある。この記事からとったかどうかは定かではないが、津波のためにいったん解放された囚人が戻ってきたところに、メイベルは心を動かされたのだろう。雄勝は石盤の採掘で有名なために受刑者が作業に当たっていたが、大津波で囚人195人が解放され、受刑者4人、職員8名が死亡したという。そのうち、受刑者3人は人命救助にも協力し、逃亡したものは4人だけであったという記録（『宮城県海嘯誌』）が残っている。この記録は災害の4年後に発行されたものなので、彼女が詳細を知るはずもないが、先に触れたような簡単な記事ながら、彼女は賞賛すべき日本人の特性としてとらえたのであろう。

また、漁船の漁師が経験した話として、不思議な記事を紹介している。漁に出ていたために大津波を知らない漁船の漁師は、帰宅して死の光景に出くわすまでは、家にいた人々を襲った津波の恐怖を知るべくもなかったという。さらに、海に出ている別の漁師の集団は、当惑しながらも躊躇することなく漂流していた子供を拾い上げた。一人、二人と救い上げ、彼らの一人は自分の子が流されてきたのを拾い上げるようになったという。これらは、同じ『東京朝日新聞』の6月26日付の「惨話一束」中にある。「漁夫」と題するものは、漁から帰った翌朝、家も家族もなくなっていたという前者の話であり、「救いてみれば吾子」はまさに後者の話であった。

また、何百本という松の木が津波で跡形もなくなり、もぎ取られた根の部分だけが残ったという話や、波にさらわれるのを免れた松の枝にしがみ付いていた男女が救われた話などもある。また、釜石付近の無人島である三貫島に、波によって打ち上げられたおかげで助かった話などもとりあげている。幸運な例の続きとして、旅の途中、宿で被災した男が津波に巻き込まれた際、近くの女数名にしがみ付かれて身動きが取れなくなったものの、おとな数名という塊になったことから、波の威力に抗って、飲みこまれることなく陸地に残ったというような話も紹介する。最後の話などは、やはり『東京朝日新聞』6月23日の「海嘯目撃者の談話」のところに、大浦村の宿に泊まった旅人の話として載っている。この記事によると、実際

は、4人の女にしがみ付かれて逃げられなかったが、そのために波に十数間押し流されたものの、巻き取られずに済んだと具体的な数字とともに紹介されている。

通訳が、エピソードとして興味深いと判断したものをかいつまんで紹介している様子がうかがわれる。なお地震が起こった地形や、日本はいかに地震が起こりやすいかなど、地理や地政学上の説明にも触れているところに、科学者の妻であるメイベルの面目躍如である。「海嘯の歴史」として、『東京朝日新聞』の6月18日付は、享保、天保、そして安政元年、そして明治になってからは広島、名古屋と海嘯（津波）が恐ろしいほどの頻度で起きていることを伝えている。さらにその原因として巨智部（コチベ）博士（巨智部忠承1854－1927、応用地質学の草分け）のトスカロラ海淵という急斜地層が崩壊して大津波の原因になるという説が取り上げられている。メイベルは、巨智部博士の津波の原因説が最も学問的に正しいと思うと述べているが、おそらくこの朝日新聞の記事あたりがもとになっているのだろう。彼女はこの説に大変関心があるらしく、「海は岸からある程度離れたところまでは浅いが突如深くなる。その深みはトスカロラ海淵（千島海溝の中央部）と呼ばれ、少なくとも4000ファズム（7200メートルほど）ある。この壁、もしくは崖の一部が水中の地震で崩れて大津波を起こした可能性がある。普通なら数百ファズム（500メートル以上）の深海に住む2匹のコヤスガイが、1匹は死んでいたものの、大津波の後には波の端にあたる岸近くで見つかっている。」⁽¹⁷⁾と述べている。

先に触れたように、記事の内容は通訳が要約、もしくは意識して伝えてくれたものの中から、メイベルがこれと思うものを選んだのだろう。記事に加え、津波の絵が挿絵画家によって描かれていたことも彼女は述べており、その過酷な惨状は一目瞭然であった。メイベルの書いた「大津波」の章にも、挿絵が1枚添付されている。「地元の雑誌に描かれた津波」と題するこの挿絵は、家の屋根を超えて迫りくる大津波を背景に、母と思しき老婆を背負って逃げようとする男の片足に幼子を背負った若妻らしき女性がしがみつこうとしている

図である。男は振り返るものの、遮二無二に迫る女を置いて行こうとしているかのように見える。女は振り切れまいと必死である。さらに背景の波の間には、飲み込まれた人の顔らしきものが覗かれるといった光景である。この絵について、メイベルは、「日本で老人が受けている無償の愛と尊敬は、このような挿絵にもよくあらわれている」⁽¹⁸⁾と述べている。この絵の内容以上に説明を付け加えることはしていないが、西洋ならまず妻子の救助が優先されるだろうが、日本では親が先だということを理解したうえで、これらの記事を取り扱っていると思われる。さらに、祖母と自分の幼子の両方を救おうとしたものの、彼らとともに自分の命をも落としてしまった若い女性が、片手で祖母の着物をつかみ、もう片方で赤ん坊の着物をつかんでいたという悲しいエピソードも紹介している。

メイベルの本にある挿絵に関しては出典を探したが、該当する作品は見つかっていない⁽¹⁹⁾。当時の津波の惨状については、記録した写真が数多く残っている。また、挿絵もそれと同じくらい多い。特に当時発行の雑誌のうち、挿絵で世相を紹介した『風俗画報』は、1896年7月から8月にかけて発行された118号から120号の3冊で海嘯特集を組んでいる。それぞれの表紙には津波関連の絵を配し、本文も大半が津波に飲み込まれようとしている人々や、波が引いた後の被災地の惨状を描いた挿絵からなるが、メイベルの関心を引いた老母と妻の間で戸惑う男性図は含まれていなかった。

荻浜を出港した大連丸は、瓦礫が漂う悲惨な被災地沖を航行していった。メイベルは、瓦礫の中に見たものについて触れている。「かつては生きていた人だったが、今はそれとはわからぬほど色が褪せた死体が流れている。その日のうちにさらに2、3体が流れていった。」⁽²⁰⁾という生々しい描写が続く。さらに、津軽海峡にさしかかると、「災禍に苦しむ地を逃れて得た、なんとも言い難い安らぎであった」⁽²¹⁾と書いている。メイベルの視線は、船中雑誌に見た絵から海へと移るにつれ、漂流する遺体というもっと生々しい現実に突き当たるのだった。

『皆既日食とコロネット号』の中の一つの章に過ぎない作品だが、1896年当時の日本を描こうとし

たときメイベルが割愛することができなかったのが、津波だったのではなからうか。また、彼女が書きたかったのは、被災地の悲惨さを伝えるというだけでなく、災害に直面した日本人がいかに行動したかであった。家族を探すことより職務を全うすることを優先させた電信員、規範を守った囚人など、日本社会を知るうえで特筆すべきことに出会ったのである。さらに、メイベルの眼は、家族内の人間関係もとらえていた。津波に飲み込まれるという恐怖の中で、老親と妻子の板挟みになる男性の姿は、カップル中心の家族関係からなるアメリカ社会では到底受け入れがたいものと映ったのであろう。

おわりに

メイベルの『皆既日食とコロネット号』の出版直後に出た書評（*The Nation*, Dec.15, 1898）では、来日直前に立ち寄ったハワイ諸島の章で、社会、政治、教育、自然などに鋭く切り込んだメイベルの視点が高く評価されている。日本においても、彼女の視点は変わらなかったといえるだろう。特に日本政府のあり方等に、直接言及するものはないものの、各章で社会をはじめ、風俗や人間関係にも深く切り込もうとしたことは言うまでもない。書評では、「日本再訪」の章が示唆に富むとして称賛されているが、それには、これに続く各章へと読み進むにあたり、日本理解のために必要なものを示唆し、それに取り組む彼女の姿勢を物語っているからだろう。

特に本稿で取り扱った「津波」は、来日直後に飛び込んできた最大の事件であった。この『皆既日食とコロネット号』は、タイトルが示す通り、「皆既日食」観測を中心とした北海道でのエピソードが中心になることは言うまでもないものの、その旅の途中で直接見聞することになった、津波が残した爪痕は見過ごすことができない現実だった。そのうえ、緊急事態に直面した人々の対応には、その社会がもつ特性がとりわけ顕著に表れる。メイベルは、被災時の日本人の行動を、その民情を知る特別な機会ととらえ、描き続けたのだった。

注

- (1) Poly Longworth, *Austin and Mabel: The Amherst Affair and Love Letters of Austin Dickinson and Mabel Loomis Todd*, (Univ. of Massachusetts Press, 1984)
- (2) 女性最初の富士山登頂者のファニー・パークスは、夫ハリー・パークス駐日英国公使と一緒に1867年に富士登山を行った。しかし登頂記にあたるようなものを残していないことが、あまり知られていない原因かもしれない。ただ、パークス夫人自身による書き物はいまのところ見つかっていないものの、パークス夫妻とともに登頂した医者 of W.・ウィリスが、弟に宛てた書簡でパークス夫人の登頂に触れている。(Hugh Cortazzi, *Dr. William Willis in Japan 1862-77*, (London: Althorn Press, 1985))
- (3) Poly Longworth, 258-30
- (4) Mabel L Todd, *Corona and Coronet: Being a Narrative of the Amherst Eclipse Expedition to Japan, in Mr. James's Schooner-yacht Coronet, to observe the Sun's Total Obscuration 9th August, 1896* (Boston & N.Y.: Houghton Mifflin, 1899).
- (5) *The Nation* の4回の掲載は、1回目から4回目まで、次のような順である。6月18日、7月30日、9月24日、10月8日。
- (6) “In Ainu-land with the Amherst Eclipse Expedition,” *The Outlook*, October 10, 1896. “In Quest of a Shadow: an astronomical experience in Japan,” *The Atlantic Monthly*, September, 1897. “In Aino-land,” *The Century*, July, 1898.
- (7) 作者不明 *Coronet Memories: Log of Schooner-Yacht Coronet of Her Off-shore Cruises from 1893 to 1899* <http://archive.org/stream/coronetmemories100londiala> 2016/09/06
- (8) *Coronet Memories* 「ペンバートンの日誌」10章の補遺
- (9) *Coronet Memories*, 119.
- (10) *Corona and Coronet*, 139.
- (11) Lafcadio Hearn, “My First Day in the Orient,” *Glimpses of Unfamiliar Japan* (Boston & N.Y.: Houghton Mifflin, 1894) 冒頭部分 “Do not fail to write down your first impressions as soon as possible, (中略) they are evanescent, you know ; they will never come to you again, once they have faded out;” 早いうちに第一印象を書き留めるよう忠告を受けたとして、日本の描写が始まる。
- (12) *Corona and Coronet*, 151.
- (13) ハーン作品は、濱口梧陵という実在する人物(作品では濱口五兵衛)を主人公にして、彼がどのようにして押し寄せる津波から村人を救ったかを、脚色することにより劇的に描いたものである。ハーンは、この作品中、明治以前の地震とだけ述べているが、濱口が村人の救済に貢献したのは、郷里和歌山が罹災した安政地震のおりである。ハーン作品では、津波が押し寄せた方向(本来なら和歌山県の場合は西や南西からだが、ハーンの本では東からになっている)に間違いがあることから、地震に関する情報は、ハーンが日本にいたときに体験した1896年当時の明治三陸地震がもとになっていると考えられる。初出は『アトランティック・マンスリー』(1896年12月)だが、後に *Gleanings in Buddha-Fields* (1897) という作品集に入った。
- (14) *Coronet Memories*, 144.
- (15) *Corona and Coronet*, 157-59.
- (16) *Corona and Coronet*, 245.
- (17) *Corona and Coronet*, 250.
- (18) *Corona and Coronet*, 248.
- (19) 富岡永洗(1864-1905)の手によるものではないかと思われる。富岡の「母を背負い妻を助けて濁流に漂う図」(山下文男編『写真と絵で見る—明治三陸大津波』1995, p.14)はメイベルの見た絵に続くものと想像できるからである。
- (20) *Corona and Coronet*, 251.
- (21) *Corona and Coronet*, 251.